

〈書評〉

関口 安義

『国語教育と読者論』

町田 守弘

1

本書を読んで、わたくしは次のような光景を想起した。それは、「羅生門」を扱ったことである。通読、初発の感想、情景・心情の把握と、型通りの指導過程を経て、作品の主題を問う段になった。「羅生門」を通して、作者が最も訴えようとしたことは何か、と発問する。ところが生徒たちは、何の反応も示さない。教室全体が、どことなく沈滞している。数名の生徒に指名しても、よく分からないという返答しか返ってこない。そこで致し方なく、一つの例として「人間のエゴイズム」説を紹介する。すると生徒たちは、初めて鈍い反応を示した。「人間のエゴイズム」と板書すると、生徒たちは待っていたとばかり、それをノートに写す。「エゴイズム」という用語について補足説明をするために、赤いチョークで傍線を引く。すると驚いたことに、大多数の生徒が赤い筆記用具を出して、ノートに線を引いたのである。小説の主題について考えてみることは重要だとして授業を結んだが、後でノートを点検して愕然とした。「人間のエゴイズム」と書いた箇所に、何と「試験によく出る」という小さなシールが貼られて

いたのである。

定期試験の前になると、生徒たちはノートの暗唱を始める。いつもはロッカーに置いたままの教科書を出してきて、ノートや「アンチョコ」の説明を覚えながら学習する。もしも試験に「羅生門」の主題を問うような問題を出したら、彼らは即座に「人間のエゴイズム」と答えるに違いない。それが正解として得点に加えられた瞬間、彼らは「羅生門」を理解したという錯覚に陥るのだろうか。

読んで説明して分からせる、という形式の授業が多い。教師の説明の基盤には、常に一つの〈正解〉が存在している。その〈正解〉へと導くために、様々な発問が工夫され、生徒たちの反応が巧みにコントロールされる。その結果、生徒たちの多様な読みは切り捨てられることになる。一人ひとりの読みを、もっと大切にするような授業ができないものか。国語教室をもっと活性化することはできないものか。

以上のような光景と、それに基づく問題意識は、多くの国語教師に共通するところである。では、いったいどうすればよいのか。その点に関して、本書は多くの示唆を与えてくれる。

2

本書は『文学教育の課題と創造』（教育出版、一九八〇・一〇）に次ぐ、関口安義氏の二冊目の国語教育論集である。一九八一から八五年にかけての五年間の論文が、次の五章に分けてまとめられている。

第一章 国語教育と読者論

第二章 〈読み〉のあり方を求めて

第三章 文学教材の〈読み〉とはなにか

第四章 文学作品の教材化 上（小学校編）

第五章 文学作品の教材化 下（中学・高校編）

「あとがき」において、筆者は次のように述べる。

一本にしてみると、そこに学習者の主体を尊重した〈読み〉の回復、その位置付けへの熱い願いが込められているのに改めて気付かされる。それは本書が八〇年代の教育状況と決して無縁ではなかったことの証左ともなる。（二〇六頁）

では、関口氏は「八〇年代の教育状況」を、どのように把握しているのだろうか。再度「あとがき」から引用する。

一九八〇年代に入って、日本の社会における受験体制は一段と強化し、それに伴う国語科教育における〈読み〉の指導の退廃現象は、いわゆる正解到達主義という明確なかたちを取るようになった。（二〇六頁）

この「〈読み〉の指導の退廃現象」および「正解到達主義」の具体例として、筆者は一九八四年九月二八日に報告書が出た文部省の学力調査（昭和五十六年度小学校達成度調査）を引き合いに出す（八頁）。同年一〇月一日および五日の『朝日新聞』の「天声人語」は、この調査における国語科の設問の一部を批判しているが、関口氏はこの批判を「きわめてまともなもの」（二〇頁）としてとらえる。本書では、受験戦争の激化とともに教育現場でか
なりの説得力を有する「正解到達主義」が、〈読み〉の喜びを阻

害し、子どもの国語嫌いを招来するものとして、厳しく批判されている。

注目すべきは、この「正解到達主義」の淵源を、国語教育の世界を長く支配してきた垣内松三以来の〈国語教育解釈学理論〉にあるとした点である。国語教育の古典的名著とされる垣内松三の『国語の力』や石山脩平の『教育的解釈学』などが、最近批判的に読まれるようになったのは、それが「正解到達主義」の源流としてとらえられたからだだろう。

「正解到達主義」に対する関口氏の批判の論理的基盤には、H・R・ヤウス『挑発としての文学史』（嚮田収訳、岩波書店、一九七六・六）やW・イーザー『行為としての読書』（嚮田収訳、岩波書店、一九八二・三）の〈読み〉の理論がある。いずれも、作品の〈読み〉における読者の役割を重視した〈読者論〉であるが、本書はこの読者論の視点を国語教育の〈読み〉の指導に導入しようとした、意欲的な論集となっている。

3

読者論が識者の関心を集めるようになったのは、外山滋比古の『修辭的残像』（垂水書房、一九六一・四）と『近代読者論』（同上、一九六四・三）が出てからのことである。前田愛も『近代読者の成立』（有精堂、一九七三・一）において、読者論に関する様々な問題を提起した。その後、ヤウスやイーザーの著作が紹介されるに及んで、読者論に対する関心が急速に高まってきた。文学研究の領域で、読者論の考え方をふまえた論文が書かれるよう

になった。

当然のことながら、『読み』の問題は国語教育の領域でもきわめて重要なものであり、読者論に関心が寄せられるようになってきた。関口氏は本書の第二章で、『日本文学』（一九八〇・三）に収録された西郷信綱の「作者と作中人物と読者」を踏まえて、次のように述べている。

「読む」という行為に、（中略）読者の参与を大幅に促す読者論の立場は、国語科教育にも導入しなければならない大事な観点である。（三四頁）

国語教育への読者論導入の試みは、主として関口氏が所属する日本文学協会のメンバーによってなされてきた。田近洵一は『教育学科学国語教育』（明治図書）に、一九八三年四月から八四年三月まで「読み手を育てる」と題する論文を連載し、読者論から読書行為論へという道筋で『読み』の指導の問題を追求した。府川源一郎は『文学教材の『読み』とその展開』（新光閣書店、一九八五・一）において、読者の役割を重視しながら、文学作品の『読み』を実践に即して検討した。こういった日本文学協会の姿勢は、一九八四年から二年間にわたる国語教育部会の「文学教育における『読み』」というテーマに、端的に現れている。

また、本書に収録されている「読者論導入による授業の改革」（第一章）を巻頭に、注目するべき多くの論文を掲載した『教育学科学国語教育』の特集（一九八五・九）も、国語教育における読者論導入の可能性を考える上で重要な文献である。

このように、読者論とのかかわりにおいて『読み』の問題を見

直そうという動向は、すでに国語教育界でも広がりつつあるが、研究の成果を体系的に一冊にまとめたのは、管見によれば本書が最初である。本書によって、国語教育関係者の読書論への関心は、より高まってゆくに相違ない。

4

ここで改めて、筆者の主張を整理してみよう。筆者関口氏が拠り所としたのは、ヤウスやイーザの「文学作品イコール虚構テキストを読むとは、作者の意図を発見することではなく、読者が読むという行為を通して、テキストを加工していくのだという考え」（三三頁）である。こうした読者論の立場をふまえて、国語教育解釈学理論を淵源とする正解到達方式の授業に、次のような厳しい批判を加える。

学習者の想像力によってふくらむ多様な『読み』は拒否され、教師の考え、または教師が参考にした書物に導かれた見解によって、『読み』は矮小化されてしまうのである。主題を考えるということで、作品の『読み』を一つに絞り、そのみを正解とするやり方など、まさにその典型といえよう。（七一頁）

そこで筆者は、国語教育とりわけ文学教育における『読み』の教育の可能性について、次のように述べる。

文学のテキストは、学習者と一体となって変容する。彼の想像力によって伸び縮みするのである。教材本文から逸脱しない限り、どのような『読み』も許容される。そうした『読み』を保障する時、学習者は、教材の中に自己を解放し、教材本文の

呼びかけに応じて〈対話〉する。その意味で、テキストの中の自己表現に期待することこそが、〈読み〉を取り戻し、活性化の道につながると言えるのである。(二二頁)

なお、筆者の批判の対象は、単に正解到達主義にとどまらない。今日なお多くの支持を得ている興水実の「基本的指導過程」を、「やがて緊張や創造性を欠いた安易な実践体系と化してしまふ」(三三頁)と評し、最近爆発的なブームを呼んでいる向山洋一の「分析批評」(「教育技術の法則化」と言い換えてもよい)を、「ことばの芸術としての理解を欠いた安易な実践理論」(二二頁)と評している点にも注目したい。

もう一つ、筆者は読者すなわち学習者を尊重するが、学習者論に偏ることなく、テキスト論を重視していることは、たとえば次のような発言からも明らかである。

学習者の主体を尊重した〈読み〉と、わたしの考える新しい〈読み〉の指導とを分かちものは何か。それは一にテキスト論の介在の有無にある。(一八頁)

5

わたしは冒頭で、ある授業風景を紹介し、そこから派生するいくつかの問題点に触れた。それを関口氏は、次のようなことばで整理してくれた。

まず、〈正解到達方式〉が〈読み〉の楽しみ、喜びを奪い、国語の授業そのものを嫌いにさせている現状を、わたしたちは危機意識をもって直視する必要がある。次に指導者の〈読

み〉を押しついたり、教材本文を離れたところで、主題をめぐる話し合いをしてみても、国語の力は付かないことを確認したい。(二二頁)

本書を読んで、そのめざすところは何とか理解できたような気がするのだが、冒頭に掲げた問題はわたしの内部でなお残っている。問題解決のためには、読者論を導入した授業を試みればよいのだろうか、具体的にどう展開したらよいか分からない。

わたししが引き合いに出した「羅生門」が、本書の中でもいろいろと話題になる。周知のように、関口安義氏は芥川龍之介の研究者で、最近『芥川龍之介事典』(明治書院、一九八五・一二)を編んでいる。その〈読み〉には学ぶところが多いわけだが、さて「羅生門」を読者論をふまえて実践するとしたらどうなるのか、その答えは本書には直接書かれていない。(この点に関しては、『日本文学』一九八四年八月号に収録された「座談会『羅生門』を読む」が参考になる。関口氏が司会。)わたしたちのような現場を担当する者が、氏の論をふまえながら、編み出していかなければならないようだ。

読者論を国語教育に導入しようという試みは、本書によってかなり進展したといえる。問題は実践である。読者論による授業をいかに実践し、筆者の論を検証するかということが、今後の課題となろう。なお、『日本文学』一九八六年二月号に収録された日本文学協会第四〇回大会(報告国語教育の部)が、今後の課題を確認する上で参考になることを付記しておきたい。

(一九八六年二月 明治図書刊 二一六頁 二五〇〇円)